

## リットン・ストレイチー著・中野康司訳 『ヴィクトリア朝偉人伝』

中原 章 雄

ロンドンのトラファルガー広場に近い国立肖像画館を訪れて一九世紀の展示室のフロアに至ると、おそらく大抵の人は、困惑と退屈に襲われる。ほとんど聞いたことのない政治家・軍人・宗教家らの、圧倒的な男性集団が何室も続く。だが大陸諸国に例を見ない館が一九世紀半ばに建てられた趣旨は、これら大英帝国の著名な（エミネント）人々の肖像展示であった。

おそらく同じ形容詞を使って、ストレイチーがヴィクトリア朝名士伝を、三対一の男女比でまとも上げたこと自体、世紀転換を象徴する壮挙にちがいがなかった。

### 1

リットン・ストレイチーと、彼の代表作『ヴィクトリア朝偉人伝』は、日本でも以前から知られていた。イギリスの伝記および伝記作者としては、最も知られていたとも言える。それだけに、いまなぜストレイチーなのか、という疑問が持たれるかもしれない。それも不思議ではないだろう。『ヴィクトリア朝偉人伝』の出版からすでに百年近い歳月が経過しているのだから。

だが英米ではいまでも、ストレイチーという名を聞くと、身構えるひとがいる。そのことについては、以前に少し書いたことがあるが、ここでは別の面から論じたい。

現在におけるストレイチーの位置を示す象徴的な例をひとつ挙げておこう。今世紀初頭に出版された新シリーズオクスフォード英文学史の『ヴィクトリア

朝人たち』と題する一九世紀の巻は、序論をストレイチー論から始めている。

オクスフォード文学史が正統派の研究・批評の代表とすれば、かつてストレイチーはその対極的なものでさえなかった。むしろ、彼を黙殺することこそが正統派の証であった。ところが、今やヴィクトリア朝を論ずるためには、まず彼を異端として認知することが必要になったのである。

日本の読者にとつては、新しい訳書の意義は、なによりも『ヴィクトリア朝偉人伝』を完全な形で読めるようになったことであろう。とりわけ、四人の伝記のなかで、最も充実したマニング伝が初めて日本語で読めることは大きい。マニング伝は、太平洋戦争直前に吉田健一が同人誌に途中まで訳して中絶しているが、今回が事実上本邦初訳と思われる。

個々の伝記についての論評は後回しにして、もう少し全体にかかわる点に触れておこう。

『ヴィクトリア朝偉人伝』出版にいたる興味深い逸話を、伝記作者マイケル・ホルロイドが一九六〇年代に出版した画期的なストレイチー伝のなかで紹介している。第一次大戦当時の著名なジャーナリストのフランク・スウィナートンの自伝からの引用である。

スィナートンはピカデリーにある出版社のオフィスで、当時まだ一般には無名に近いストレイチーが持ち込んだタイプ原稿を読み始める。すっかり魅了され、自宅に持ち帰って読み続ける。その晩、たまたまドイツ軍機の空襲があった。爆音が響き近くで対空砲火の炸裂するという異常事態の下でも、灯火管制中の書齋で彼は原稿を手放すことができなかったという。

われわれは、本書が第一次大戦後の反ヴィクトリア朝的な意識の導火線となったように思いがちだが、実際に出版されたのは、戦争が終わるより半年近く前のことであった。人々の厭戦気分は抑圧しがたく蔓延していたが、苛酷な戦争はまだ続いていたのである。

ストレイチーは「序」の有名な箇所、対象とする人物の暗部を照らし出す

という伝記作者の責務を語るさいに、サーチャイト（探照灯）の比喩を用いて、戦時中の読者の共感をえようとしている（ドイツ機の空襲に対抗して、この新兵器が導入されたのは開戦から三年目であったと云われる）。ストレイチーが書いた四人の伝記は、すべて実質的には、大戦中の作業で、それは戦時下の緊張感のすべてを包み込んでいるのである。

訳書の帯には「偶像破壊の書」という文句が記されている。たしかに、本書の果たした役割はそういう面が強かった。「デイバンキング」という言葉がつねに付きまどってきた。それだけに、偉人の「仮面を剥ぐ」という仕事がつむと、一九三〇年代ころから、ストレイチーの伝記的手法はもう古いと片付けられることにもなった。

ちょうどヴィクトリア朝の再評価が始まり出して、その風潮と呼応して、一時はストレイチーは忘れられたかのようでもさえた。けれども、彼が成し遂げたのは、けっして安直な「デイバンキング」ではなかった。

これもホルロイドが実証しているように、ストレイチーは個々の伝記をブルームズベリーの仲間に読み聞かせ、そのさまざまな反応を考慮にいれながら、仕上げていったのであった。あくまでもストレイチーの著書でありながら、新しい芸術運動を興そうとする仲間のコラボレーションの面さえあったのだ。ちょうど小説家として出発しつつあったヴァジニア・ウルフとの間の、暖かい理解と同時に緊張感をも持続した交流と応酬は、とりわけ重要なものであった。

少なくとも、完成した伝記は、ヴィクトリア朝の、またその時代の人々の荒っぽい破壊作業というようなものではなかった。出版当時の衝撃は失われたにせよ、イギリスの伝記文学における地位はすでに確立していたのである。

もつとも、ストレイチー自身が誤解を招くような言葉を使っていることも事実である、ナイティンゲール伝の冒頭の一節を引こう。

フローレンス・ナイチンゲールの通俗的なイメージは誰でも知っているだろ

う。自己犠牲の精神にあふれた聖女。富裕な地主階級に生まれながら、病み苦しむ人々を救うために、みずからの安穏な生活をなげうったか弱き乙女。クリミア戦争中、トルコはスクタリの、地獄図さながらの野戦病院をしずしずと歩きまわり、瀕死の兵士たちのベッドを慈愛の光で清めた、「ランプを持った貴婦人」。

だが、クリミア戦争でのナイチンゲールの大車輪の活躍の場面では、「ランプをもった淑女」あるいは白衣の天使といった優しい女の姿ではないが、ナイチンゲールの姿は、かなり好意的に、しかも的確に描かれている。

そのあと、彼女は戦後に軍の改革に関して、所轄の大臣さえ追い詰めるほどの烈女ぶりを発揮し、雌虎に譬えられている。虎が牛を倒すという、ストレイチーの得意の動物のイメージが使われる。演劇仕立てを意識したナイチンゲール伝のなかで、あまりにも有名なクリミアの場面以上に、ストレイチーはこの部分をむしろクライマックスとさえ考えている。

けれども、ヴィクトリア朝の理想的な女性像からどれほど隔たっているのせよ、鉄の女に長期政権を委ねた今日のイギリスから見ても、ナイチンゲールの猛烈な活動ぶりは、それだけでは、もはや意地悪い批判の対象になりえないし、じつさい、二〇〇八年に出版された、マーク・ポストリッジによる新しい彼女の伝記も、多くの新しい事実を発掘し、これまでの伝記を修正しているとはいえ、基本的にはストレイチーの像を継承している。

ポストリッジの伝記を待つまでもなく、ストレイチー自身が『ヴィクトリア朝偉人伝』の「序」のあとに、わざわざ斜字体で強調した注をつけて、彼の伝記がエドワード・クックのナイティンゲール伝に負うところが多いことを付記している。クックの詳細な伝記は、出版と同時にその信頼性が高く評価された良書であった。

ストレイチーは、四人の各伝記の終わりにそれぞれ参考書目を付しているが、

それに加えて、巻頭にクックの伝記への依拠を特記したことは、単に一冊の参考文献への謝辞であるにとどまらず、みずからが、クックの総じて穩健で信頼できる伝記の手法を評価し尊重していることを明記したものである。

なお、邦訳との関連で云えば、本書の有名な「序」は、ストレイチーの新しい伝記の宣言として、これまでに何度か訳されているが、いま言及した付記は、それらの翻訳でつねに無視されてきたようである。彼がとくに付け加えた部分が初めて訳されたことも、今度の訳書の重要な意義であろう。

ナイチンゲールを取り上げるに際して、ストレイチーが彼女のパワーに辟易していた面があることは確かであろう。彼女の狂信的なほどの信心深さを、他の三人の場合と同様にストレイチーが批判しようとしたことも事実であろう。けれども一方で彼には、強い女への、強迫観念ともいふべき持続的な関心が存在したことも否定できないようである。理由はともあれ、以後ストレイチーは、ヴィクトリア女王、エリザベス一世、とさらに強い女を書き続けることになる。

## 2

アーノルド博士は「たぶん標準より短足だった」。ストレイチーによる博士の伝記で、最も悪名高いのはこの箇所であろう。じつさいには、アーノルドは中背であって、この記述は根拠のない中傷であるとされる。ここでそれ以上にこの点の真偽を問題にしないが、当該箇所の前後を引用しておくのは、無駄ではないとおもわれる。

彼の内面的性格が、そっくりそのまま外見に現れていた。つまり彼の外見は、精力的で、真摯で、善意の人であることを示していた。たぶん標準より短足だったが、運動選手のようながっしりした体格で、堂々たる活力にあふれていた。

このあと、伝統的な式服姿の上に「がっちり」と据えられた顔は、明らかに卓越した人物であることを示していた」と続く。けっしてストレイチーによる博士の全肖像が偏見に彩られていないことが分かるであろう。

けれども、ストレイチーのシニシズムを至る所に見出そうとする人は、博士の夫人が「結婚して、八年間に六人の子供を産み、そのあとさらに四人の子宝に恵まれた」という箇所にも、それを読み取るかもしれない。そのあとは、「威厳に満ちた校長が幼児を膝に抱いてあやし、絨毯の上で四つん這いになってお馬さんごっこをするのである」という描写が続く。これがいかにもリアルであるだけに、おそらく反ストレイチー派は、ここにも、威厳ある校長を揶揄する伝記作者の策謀を看取したにちがいない。だが今日では、陰謀説に加担する一般読者は少ないだろう。少なくともストレイチーは、「お馬さんごっこ」に興ずるアーノルド校長を捏造したとは思われないだろうから。

教育者の像は、英文学においてシェイクスピアからデイクンズまで、かなり辛辣な扱いを受けてきたし、おそらく現代の小説でも優れた聖職者像の例を挙げるのは困難であろう。ヴィクトリア朝であろうと、二〇世紀であろうと。大英帝国の中等教育がかかえている矛盾を暴露することなく、読むに値する教師像を創造しようとするれば、それは至難の技にちがいない。

あえてパブリック・スクールの教師像を挙げるならば、ジェイムズ・ヒルトン作の『チップス先生、さようなら』が思い浮かぶ。この作品の出版は一九三四年で、主人公はその少し前の一九三〇年、すなわち第二次大戦前まで生き延びて高齢で死ぬのだが、生まれたのは一八四〇年と明記されている。すなわち一八四二年に死去したアーノルド校長の晩年の教え子とそう変わらない世代ということになる。

チップスは、愛すべき平凡な教員だが、大戦中、学校が空襲にあったときの勇敢な行為で一躍校内の英雄になる。長い教員生活を回顧する形式で語られる物語りは、明確な年代がところどころに挿入されて、その限りでは現実の歴史を

追っているが、その回想は「年をとつてくると、どうにも眠たくてうつらうつらすることがある」という言葉で始まる。良き時代のパブリック・スクールの日々が、老年のノスタルジーにたっぷり包まれて提示されるのである。

アーノルド校長は、サミュエル・スマイルズの『自助論』でも取り上げられていて、教育者の例が少ないこの本のなかで目だっている。それ以上に目立つのは、彼の代表的な教え子として、ウィリアム・ホドソンが繰り返し登場することである。一九世紀には著名であった、この軍人は、インドのセポイの反乱で勲功をたてるなど、帝国の植民地政策に大いに貢献した人物であった。

アーノルド博士は死去したのが一八四二年だから、ヴィクトリア朝人とは言えない、という批判がなされることがある。けれども彼が、ホドソンのように植民地での勲功によりこの時代を築いた多くの卒業生を育てた教育者である以上、ストレイチーにとっては十分に批判の対象としての資格を備えていたのである。

アーノルドについては、関連する重要な文献として（半世紀前の出版だが）、エイザ・ブリッグズの『ヴィクトリア朝の人々』に言及する必要がある。これには邦訳もある。明らかにストレイチーを意識した題名であり、ブリッグズも序論のなかで『ヴィクトリア朝偉人伝』を論じている。

けれども、ブリッグズはストレイチーをエクセントリックな歴史家扱いして、彼のヴィクトリア朝人への「悪意」を強調するばかりで、まっとうな議論を避けている。また、当時の「新しい」文献よりストレイチーはもう古くなったことを示そうとする。けれども、先に述べたように。今日、新しく復活したのはストレイチーであって、ブリッグズが挙げている文献は、むしろすでに古色を帯びている。

ブリッグズの第六章「トーマス・ヒューズとパブリック・スクール」は、事実上トマス・アーノルド論になっている。ところが、そこではストレイチーは不当に無視されている。

ヒューズの小説は主人公トム・ブラウンの入学から始まるが、ブラウン家の家系の短い説明のなかに、いかに彼らが帝国建設にそれなりに貢献したかが、古戦場と著名な将軍と提督たちの名がちりばめられていて、今日ではおそらく相当愛国心に富むイギリスの若者でも当惑するだろう。ブラウン家は武勲の家と評されていて、実際、この小説のテクストは好戦的なイメージに溢れている。

ストレイチーの伝記を排除しつつ、ここでは改めて、「ワートルローの大勝利は、イートン校の運動場で勝ち取られた」という、イギリス人には昔懐かしい伝説が再確認されつつあるかのようなのである。

ストレイチーは伝記の最後に、教育改革者アーノルドについて、彼がパブリック・スクール教育を一変させるだろうという、オクスフォードの学寮長の推薦状にある予言が「正しかったことは間違いない」と認めている。その上で、「だが実際の教育制度に関する限り、彼は改革を行わなかったばかりか、意識的に古い制度に固執した」と述べ、結局、古典語の文法教育を中心にした「旧態依然の組織でありつづけた」とする。ストレイチーの伝記に関する議論は、校長の脚の長さよりこの点が中心になるべきだったろう。

パブリック・スクールに関して、ストレイチーの鋭い皮肉な眼差しが凝視したものは、おそらく、『チップス先生』の暖かいが、年のせいで霞みつつある眼差しが見たものの、裏返しだったにちがいない。

### 3

最初に触れたように、こんどの邦訳の意義は、それが原書の完訳であり、とくに、キリスト教用語の多いマニング伝が日本語で読めることになったことは有り難い。

マニング伝は、ナイチンゲールとアーノルドの二人の伝記を合わせたより長く、簡潔を基本とするストレイチーらしさを維持しながら、彼の伝記作者としての真骨頂を知る事ができる。

ストレイチーには、それぞれとくに参考にした先行の伝記があり、マニングの場合は、E・S・パーセルの『マニング伝』である。パーセルはマニングが残したの伝記資料を独占的に使うことができたのだが、晩年のマニングに誤解に基づく恨みをいだいていて、出来上がったのは、枢機卿にたいして厳しい内容の伝記であった。

ストレイチーは最初に、マニングは「徳の高さや学識の高さではなく、実務能力の高さにおいて際立った聖職者の一人」と定義し、「科学と民主主義」が勝利する「敵対的環境」のなかで、この人物が英国カトリック教の最高位に上りつめたのはなぜか、と問いかけている。そのあと、全体は一〇節に分けられている。短い第一節の終わりに、最初の問題点が現れる。

政治家志望のマニングは、裕福な実業家であった父が破産宣告を受けて、政界をあきらめ地方の副牧師になる。教区牧師の娘との結婚。間もなく牧師が死に「その後釜に座る」。妻は若死にし夫は深い悲しみに沈む。その後のことをストレイチーは次のように書く。

マニングは「自分が、妻の死を「神の慈悲」と見なすようになるとは思いもしなかった。だが後年、妻の思い出は、彼の心から完全に消し去られたかのようになつた。彼女の墓が崩壊しそうだという報告を受けると、「それが一番いいのです。時はすべてのものを消し去るのです」とマニング枢機卿は答えた」。

最近のあるマニング伝は、これほど真実を偽るものはないと批判し彼の弟子の話を紹介する。臨終の間に、マニングは一冊の古ぼけた手帳を示し、妻はそれに祈祷と瞑想を書き込んでいて、自分は肌身離さず大切にしていたのだと述べ、その弟子に遺贈したという。だが、また別の新しい伝記は、マニングが亡妻のことを問われた時、彼女とは天国での再会しか考えたことがないと答えたとしている。

前者の手帳のことは事実であろう。だが後者の問答も十分にありうる。妻の死について、ストレイチーの描くマニングは冷酷に見える。けれども残念なの

は、手帳の話を伝えた著者の次のようなコメントである。すなわち、ストレイチーが一九一八年（『偉人伝』の出版年）に、亡妻に冷たい態度をとるマニングを描いたのは、生真面目なヴィクトリア朝人を嘲弄するのが当時は「流行」だったからだ、と言うのである。

ストレイチーを批判することは自由だが、一九一八年という時期に彼が果たした役割を知らなくては批判者の資格はないし、伝記作者としての信憑性も問われるだろう。ストレイチーは「流行」に便乗するどころか、彼の辛辣なヴィクトリア朝批判は、一九一八年にはまだ相当の勇気を必要としたはずである。

この伝記執筆中に、神学やキリスト教史の書物に埋もれているストレイチーを見て、下宿のおかみさんは、彼のことを、てっきり聖職志望者と思ったといわれる。マニング伝はそれほどの猛勉強の結晶だったのである。

マニングの妻の死から伝記は一転してオクスフォード運動の「鳥瞰図」に移る。運動は「フルードがキープルの思想をニューマンに吹き込むことに成功したときに始まった」。マニングも母校での動向に関心をもっていたことは言及されるが、専らニューマンを取り巻く宗教家たちについて、ストレイチーは伝記の釣り合いを失するほど詳細に、また丁寧（そこに彼の意図が見えるが）記述する。たとえば、キープルの思想と影響について。

キープルは、初期キリスト教神父たちの神秘主義を、「人々に最初の割礼を施したアブラハム」にかかわる三一八という数字の神秘を例にとつて「小活字で一〇ページにわたる」論文を発表し、大学の敬虔な若者たちを夢中にさせる。彼の目の前に「なんと魅惑的・神秘的な景色が開けたことか！」ストレイチーは自らの周囲に群がる若い世代の、新奇な美学的・哲学的論議を思い合わせていたのだろうか。

ストレイチーは当然、キングズリーの挑発がニューマンの有名な『わが生涯の弁明』執筆を惹起した経過や反響も忠実に解説する。だが、この辺りの記述は平板で、彼を煩わすまでもない。神学論議の間には、ストレイチー好みの人間的な

逸話も挿入される。

たとえば、ニューマンの弟子W・G・ウォードの場合。

ウォードは、神学とともに音楽にも熱狂する若者だったが、四旬節中に、学寮の友人の部屋で行われた宴会で、荘厳な音楽のみに自粛するつもりが、調子づいて次第に朗らかな曲へ高揚し、ついに「最高に陽気な『セピリアの理髪師』の Aria」を彼が歌い出した途端、「静かな、だが執拗なノック」があり、一同やつと隣室の主がウォードの「霊的指導者」ピュージー博士だったことを肅然と思いつ出すという話。

また、改宗を目前にしているかのようにでありながら、なお逡巡しているニューマンに苛立つ、カトリック教指導者ワイズマン博士の場合。

博士は、ニューマンの隠棲地に彼の愛弟子スミス神父を派遣する。師は信仰の話題を避け続け、弟子は絶望しかけるが、その直後、服装に几帳面な師がデイナーの席では正装用黒ズボンをはいていないことに、ふと気がつく。もはや彼は自らを国教会聖職者と考えていないのだ！ 神父がもたらした改宗近しの推理は、果たして誤っていないかった。

マニングがイギリスで教団の最高位にのぼりつめるまでの、またそれ以後の、野心にかかわる様々な行動、あるいは画策、とりわけニューマンの枢機卿就任辞退をめぐる奇怪な経緯について、言うまでもなくストレイチーは十分に筆をふるっている。だが、あらためてそれらを辿るよりも、晩年の彼の懐疑と不安をも、ストレイチーが強調していることを押さえておこう。「結局、私はどこにいるのだろうか？ 私は何をなしとげたのだろうか？ 何か価値のあることをしたのだろうか？」。

一方でマニングは、「神の栄光に対するいかなる下心もなく、一切の社会悪と戦い始めた」。その人気は、世紀末におけるロンドンの港湾労働者のストへの仲介者として頂点に達する。こうして、枢機卿の葬儀は、労働者であふれロンドンの大通りは大衆運動のような式典となった。

伝記は、マニングの執念の象徴である枢機卿帽が地下納骨堂に置かれて、それに分厚い埃が積もった風景で終わる。

ヴィクトリア朝人の帽子への強いこだわりを思い起こすなら、われわれは、この帽子に『不思議の国のアリス』に登場する、あの帽子屋を、狂気を誇張するために時代遅れのウェリントン型帽子を被された帽子屋を連想しても、それほど見当はずれではなからう。

ストレイチーの皮肉は、真面目な読者を激怒させるかもしれない。だが同時にその目は冷厳な事実を見据えている。ストレイチーは最後に書いている。「マニング枢機卿は人々の心に強烈な印象を残した。だが、結局、その印象は永続的なものではなかった。彼の思い出は、いまはもうおぼろげなものになってしまった」。

ストレイチーは、ヴィクトリア朝の、ある宗教家の世俗的な野心のみを批判しているのではなからう。彼の筆は、人間一般の野心と栄光と欲望の空しさに向けられているはずでわる。

じっさい、いまではヴィクトリア朝史の概説書がマニング枢機卿について触れることは、ほとんどないようである。イギリスをゆるがしたドック・ストライキも、マニングとともに社会史から忘れられたようである。

先に言及したように、英米ではマニングの新しい伝記が、いまも出版されている。だがそれは、おそらく少数のキリスト教神学を専攻する研究者などを対象とするものであって、立命館大学の図書館で検索してもらった結果では、日本の大学図書館はどこも所蔵していないようであり、海外の大学から借覧せねばならなかった。

現在、一般の読者がマニングについて知るのには、ストレイチーの伝記によってであろう。それどころか、『ヴィクトリア朝偉人伝』を読んで、はじめてマニング枢機卿の存在を知る人が多いのではなからうか。

ストレイチーは、クリミヤや中国で勲功をたてた神秘主義者ゴードンがエルサレム近郊で旧約聖書の考古学的探索を行っているところから、將軍の伝記を語り始める。

浮世離れた生活から、国家がその彼にふたたび出番を要求し「彼の運命は、大英帝国の熱狂と民族の運命に巻き込まれる」ことになる。

そのあと伝記はかなりのスペースを割いて、意思統一した上でゴードンを緊急に呼び戻したはずのイギリス政府内に、じつは混乱と不統一が生じている様子を詳細に描く。

結局、伝記は、ハルツームに派遣されて、孤立無援のうちに壮烈な最期を遂げるまでのゴードンの、危機に際して些かの右顧左眎せぬ態度と、その背後で政策の齟齬から右往左往を繰り返す政治家たちの、醜悪とも言える姿を対置して描き分けている。とはいえ、この悲喜劇を辿りながら、ストレイチー自身も、風刺と同情の間を歩き来しているかのようにさえ見える。

ストレイチーがゴードンの最期の日々を書くにあたって、依拠したのは、彼がそれらの日々を克明に記して残した膨大な籠城日記であった。それは、日記のほかに書簡などの「アペンディクス」が巻末に付され、編者の長文の序と併せて、約六〇〇ページにおよぶ大冊である。

ゴードン伝のなかで、とりわけ忘れ難いのは、深夜のヴィクトリア駅頭の場面である。ただひとり、死を覚悟して、数千キロ彼方のスーダンに赴くゴードンを見送るために、数人の政府高官が集まっている。

高官たちは、各自の政治的思惑に忙殺されながらも、当面はゴードンを実務的に送り出してしきりに専念する。高官みずからがキップまで買ってやり、当座の軍資金を慌たたく手渡したりする。

ところが、送られるゴードンが最後まで気にかけてしたのは、重大な政治的任務のことではなかった。ストレイチーは、現実の国家的非常事態とまったく無関係

に、神秘主義者ゴードンの頭脳が作用することを描き出す。ゴードンが確認したかったのは、神秘主義の古典的著作が、彼が約束させた通りに全閣僚の手に渡る手筈になっているかどうかであった。「ゴードン將軍の最期」は、すでにここで、決定的になっていたのである。

軍人の壮烈な最期を描いたこの伝記は、二〇年、いや一〇年前でさえ、四人のうち、最も今日の日本の読者に縁遠い物語に思えたであろう。だが、いまではどうだろうか。ストレイチーは一九世紀後半に急激に発達しつつあったマスメディアが、以前のゴードン鼻肩が高じて、さらに民衆を煽り、また民衆に煽られて、相互に呼応しつつ「軍神」を創造する姿をリアルに、また不気味に描いている。

「ゴードン將軍の最期」は、また『ヴィクトリア朝偉人伝』全体の最後は、ゴードンの復讐戦と彼の追悼式で終わっている。

とにかく、なにもかもめでたい結末となった。アラブ人二万人の栄光の大虐殺、大英帝国の領土拡張、そして、エジプト総領事サー・イーヴリン・ベアリングの貴族の爵位が一段上がったのである。

第一次大戦末期に、あるいは戦後に、この「めでたい結末」を読んだ人々は、それが悲惨な戦争への道であったことを噛みしめないではいらなかっただろう。大戦の初期に悲惨な死を遂げた、「キッチナー少佐」の名が殺戮戦の英雄として、右の引用の直前に出てくることは、その余りにも不吉な象徴であった。

四人の偉人を言わば鷲づかみにして、ヴィクトリア朝の栄光と末路を描き切ったストレイチーの力わざを、われわれが今じっくり読むことに、大きな意味がないはずはない。

最後に、翻訳のことを付け加えておこう。主人公の壮烈な戦死と、守備隊の玉砕を描いた物語として、ゴードン伝は、一九四一年五月（堀大司訳）と一九五二

年八月（日高直矢訳）と、これまでに二度訳されている。

ともに訳者自身は何も語っていないが、前者は太平洋戦争直前の出版であり、ゴードン將軍と守備隊が玉砕するドラマは『戦陣訓』に説かれた、日本の軍人精神の先取りのように読まれたとしても不思議ではない。一方後者は、戦後の平和

主義のなかで、反面教師的に、愚かしい軍国主義の実践例として読まれたであろう。

（二〇〇八年二月 みすず書房）  
（本学名誉教授）